

鄙にはまれな

野瀬 隆平

青青とした田んぼの中の細い一本道を車で進む。ハンドル操作を少しでも誤ったら大変だ。本当にこんなところにあるのだろうか。地図を確かめると間違いなさそうだ。

半信半疑で進んでいると、そのイタリアン・レストランはいきなり現れた。瀟洒な建物である。ここだ。駐車するスペースがある。その先の裏庭を覗いてみると畑が広がっていた。

車の音に気付いたのか、中から店の女性が現れる。導かれるままに中に入ると、テーブルを二つ置いたら一杯になるほどの部屋に案内された。今夕は我々5人だけが客のようで、ゆったりと一つのテーブルだけが用意されていた。自分たちだけの為に、料理が用意されおもてなしを受けるのだ。

テーブルについて、先ずナイフとフォークのセッティングに驚く。左右にそれぞれ5本が並べられており、それ以外にもデザート用の小さなフォークがお皿の先に置かれている。それだけ料理の品数が多いという事である。予約する時に料理にはアワビや伊勢海老も含まれていると聞いていたが、さてこれからどんな料理が現れるのか期待に胸が膨らむ。

料理が半ば出た頃に、料理人が現れる。壁にミラノのドウオモの絵が飾られていたので、イタリアの何処かで修業してきたに違いないと思い、尋ねるとやはりミラノの南にあるパビアという町のレストランで働いていたという。日本に帰国し、この地で奥さんとレストランを始めたとのこと。

料理の代金はワイン代も含めて、決して安くはなかったが、同じ料理を東京で食べたなら、倍近い値段が付いている筈と同行者の一人が云っていた。東京の場所代を考えれば当然であろう。

大満足して外に出ると、辺りは闇に包まれていた。同じ道に戻るのであるが、街灯が付いていないので、ヘッドライトだけが頼りだ。慎重に細い道を進み、やっと明るい広い道に出て一安心する。後は、宿に戻り休むだけ。

寝る前にもう一度温泉に浸かろうかと考えているうちに、ホテルの明かりが見えてきた。